大江山の酒呑童子

むかし村さ人さらい来て、あまり娘こつれでいがれるはで、こまってしまって、頼光さんたちかだぎとってけるどて、一に渡辺……忘れでしまったな。五人だか六人だが出かげだが、山さ行った け、険しい山で、林の中、道もねば、どごさどういったら酒呑童子のいた山さ行ぐがわがねくて、難儀して難儀して行ったば白髪のおじいさんが出できて、

「おまえたち、おまえたち、ここ行ったて道わがねがら、この鉦けるから、この鉦ガーンと叩けば道が出るから持って行け。それからこの酒銚子さ入れでやるがら、鬼さ飲ませれば千人力の力が落ちるし、おめだ飲めば千人力の力が出るから、この酒飲ませて、かだぎとってこい」

って、白髪のおじいさんがおしぇで、まもなぐそのおじいさんがえなぐなったども、その鉦ガーンと叩けば道出で、そこ行ったば行ったば、里あってそこさきれいな姉っこが洗濯していたものだから、

「この道行けば酒呑童子いだどごさ行ぐが」

たば、

「行ぐども、あぶね。鬼に食われるから行ぐな」

「そえでもえ。おめそごにいだなだが」

たけ、

「おれ、鬼にさらわれで、そして毎日洗濯しているのだ。おめだち行けば、今晩、みな酒の肴にさえでしまうのだはて、やめれ」

たども、えどてその女の子の道案内で行ったば、手下どもがいで、

「あゝ、いい晩げの酒の肴きた。晩げの肴きた。えがった」

どて、その手下っこど喜こんでいたっけて。

それからこどその酒の肴、酒呑童子どさ、家来の者ど、

「こういう者来たから、今晩ひと晩、道にまよったから、などがしてけれどゆうた」

たば、

「ハア、それ入れれ。よしよし、餌っこ来た。ええごちそうきた」

どて喜こんでまず入れで、その晩げ酒盛りして、

「したらまずおらほの酒も飲んでけれ」

どて、チョロチョロてつげば、

「なんとハア、うまい、うまい」

って、家来っこも酒呑童子も、なんとせ、大きた二升も入るよんた盃で、ゴエゴエど何杯も何杯も飲んだば、酔っていい気持になってぐうぐうどねぶってしまったて。

さあその時だ。さあ今だ今だって、こんだ皆して持って行った兜や鎧やらをこんど着なおして、いきなり頼光が、酒呑童子さ切りかかってたば、バーンと飛んだ首が、頼光の頭さかぶりついだけども、兜のおかげで頭さ通らねで、そのときちらばった血が、蛭になったり、蚊になったりしだどいう、そういう話を聞いであったのやな。